

## 「トポス」の展開

—プラトン、アリストテレス、ベルクソン、西田をめぐって—

Felipe Ferrari Gonçalves

### 1. はじめに

『ティマイオス』において、プラトンはものの場所が存在するのみではなく、それが空虚のみを含む図形に限られた空間の部分であることを説明した。すなわち、場所というのは、それに含まれているものにとって「受容者」である。他方、アリストテレスの『自然学』第四巻における「場所」は「受容者」ではなく、物体を包む二次元的な面の結合体である。アンリ・ベルクソンは『時間と自由』(*Essai sur les données immédiates de la conscience*) という博士論文において、感覚が経験し得る等質的環境 (*milieu homogène*) として空間を考える。プラトンやアリストテレスの影響を受け、西田幾多郎は「場所」という概念に新たな解釈を与えた。彼によると、全てのものは外的な空間ではなく、意識の内に存在するという。

本稿の目的はプラトンの『ティマイオス』における *χώρα* やアリストテレスの『自然学』における *τόπος* という概念を検討した上で、ベルクソンにおける *milieu homogène* としての空間や西田における「場所」の原理を説明することにある。

### 2. プラトンにおける *χώρα*

『ティマイオス』において、プラトンは空間の存在を定義した<sup>1</sup>。その対話において、彼はデミウルゴス (*δημιουργός*) による世界 (*κόσμος*) の創造を説明し、全ての存在するものが空間 (*χώρα*) に存在することを主張した。プラトンは次のように *χώρα* について述べている。

これ(空間)は滅亡を受け入れることなく、およそ生成する限りのすべてのものにその座を提供し、しかし自分自身は一種の疑いの推理とでもいうようなものによって、感覚には頼らずに捉えるものなのでして、ほとんど所信の対象にもならないものなのです。そして、この最後のものこそ、われわれがこれに注目する時、われわれをして、「およそ有るものはすべて、何処か一定の場所に一定の空間を占めてあるものでなければならない、地にもなければ、天の何処かにもないようなものは所詮何もないのでなければならない」と、寝とぼけて主張させる、まさに当のものにほかなりません。<sup>2</sup>

それは全ての物理的なものは、存在するために、空間に存在し、何処かに存在しなければならないという意味である。それゆえ、*χώρα* はその内に有るものにとって、受容者 (*δεχόμενον*)<sup>3</sup> であり、感覚することもできなければ、知的に認識することもできないものであり<sup>4</sup>、ある「第三の類」(*τρίτον γένος*) のようなものである。

プラトンにおいて、ものは必ず、次の二つの類のうちのいずれかである。つまり、「知的事物」または「感覚的事物」である。前者は不変的なものであり、生成も消滅も受けない「イデア」(*ιδέα*) である。それらは目に見えず、感覚できないものであり、我々はそれらを認識するには、本当の知性を必要とする。後者は感覚できるものであり、イデアと同じ名で呼ばれているが、イデアの完全性がないのである。感覚的事物は他のものによって生成され、変化も消滅も受け得るものであるもので、それらについての真の知識を持つことができない。それらは我々の感覚を通じて認識されるものであるもので、必然的に何処かに存在するはずである。そのためには、彼によると、「空間」という *τρίτον γένος* は必ず存在しなければならない。

ジャック・デリダによると、第三の類は第一や第二の類と同じ特徴をもつが、同時に、第一や第二の類の特徴が全くないという。なぜならば、全ての存在者は空間に存在するので、我々はその存在を感覚できるが、空間そのものを感覚することができない。そして、空間は不変的なものであるもので、それはある程

度知性的なものであるが、しかし千変万化の感覚的事物と密接な関係があるので、空間について真の知識を持つことができない。したがって、プラトンにおける  $\chi\acute{o}\rho\alpha$  は「哲学者の矛盾のない二値論理」あるいは、ジャンピエール・ヴェルナンが説明する「肯定と否定の論理」に対立する。なぜならば、 $\chi\acute{o}\rho\alpha$  は、知性的であると同時に非知性的であり、感覚的であると同時に非感覚的であるからである<sup>5</sup>。その上、 $\chi\acute{o}\rho\alpha$  は感覚的な世界に存在するが、自らの受容者がいないので、非常に矛盾的なものである。 $\chi\acute{o}\rho\alpha$  には同時に存在者と非存在者の特徴があるので、デリダによると、それは「もの」ではない「あるもの」と言える<sup>6</sup>。

対話におけるティマイオスは絶えず  $\chi\acute{o}\rho\alpha$  を女性として考えている。彼の考えによると、知性は感覚的事物の父のようなものであり、受容者はその母のようなものであるという。一方、あるものは適しているイデアと全く同じものではないが、父 ( $i\delta\acute{\epsilon}\alpha$ ) と非常に似て、それと同じ名がある。他方、ものは母 ( $\chi\acute{o}\rho\alpha$ ) のおかげで感覚界に存在する。その母は、同時に、ものの存在の起源であり、ものがその内に存在し、ものを感覚し得るものとして成立させる受容者である。ものは  $i\delta\acute{\epsilon}\alpha$  や  $\chi\acute{o}\rho\alpha$  の子孫であり、質料 ( $\acute{\upsilon}\lambda\eta$ ) を通じて存在する。すなわち、 $i\delta\acute{\epsilon}\alpha$  は第一の類(知性的)であり、 $\acute{\upsilon}\lambda\eta$  は第二の類(感覚的)であり、 $\chi\acute{o}\rho\alpha$  は第三の類である。一方、 $\acute{\upsilon}\lambda\eta$  も  $\chi\acute{o}\rho\alpha$  もものの感覚的な存在のために非常に重要な役割がある。他方、『ティマイオス』において、プラトンは「質料」と考えられる語を使用しないので、アリストテレスはプラトンにおける「空間」を「質料」として解釈した<sup>7</sup>。しかし、アルフレッド・E・テイラーによると、両方は確かにものの存在のために必要なものであるが、質料はものの空間と全く関係がないという<sup>8</sup>。空間はそこに含まれている物体と同じ形相を持ち、そこへ出入するものに三次元性を与えるという働きをしている。もし、我々は  $\chi\acute{o}\rho\alpha$  と  $\acute{\upsilon}\lambda\eta$  を同じものとして考えるとすれば、空間も物事も感覚的な属性であり、空間を  $\tau\acute{\rho}\iota\tau\omicron\nu\ \gamma\acute{\epsilon}\nu\omicron\varsigma$  として考える必要がない。 $\chi\acute{o}\rho\alpha$  は含まれているものの受容者であり、物事の感覚的な存在の起源であるが、他方、 $\acute{\upsilon}\lambda\eta$  はものを構成する基礎 ( $\acute{\upsilon}\rho\kappa\epsilon\acute{\iota}\mu\epsilon\nu\omicron\nu$ ) であると言える。

### 3. アリストテレスにおける τόπος

プラトンと同じように、アリストテレスにとっては、全ての存在するものはある場所に存在し、全ての生成消滅するものはある場所に変化し、全ての運動するものはある場所からある場所へと運動するので、空間やものの場所は確かに存在すると言える。ベルクソンの解釈では、運動そのものが存在することは場所が存在することの証明であるという<sup>9</sup>。ものの場所を説明するために、アリストテレスはそれを水が入っている器と比較した。その例において、水は含まれているものであり、器は水の部分ではなく水を完全に取り囲むので、水の場所として考えられる。もし、その器から水を全てこぼせば、他のもの(例えば、空気)が一瞬で、水の場所を占有する。そのため、「場所」と「運動」は絶えず密接に関係している。一見したところでは、アリストテレスの τόπος はプラトンの χώρα と同じように、受容者のようにみえるが、ベルクソンが指摘するように、すでに述べた例において、アリストテレスは上述の例で常識を通じて、「場所が存在することが確かであること」を証明している<sup>10</sup>。アリストテレスは「空間」ではなく、「場所」について論じていたのである。

『自然学』で説明されている「場所」は次の五つの性質がある。(i) 場所はそこに有るものを包むものである、(ii) 場所はその内に有るものの部分ではない、(iii) 場所はその内に有るものより大きくもなく、小さくもない、(iv) ものは場所を離れることができる、(v) 自然によって、軽いものが上に運動し、重いものが下に運動するので、場所は上と下の区別を持っている<sup>11</sup>。そして、次の四つのものの一つは必ず「場所」と言える。(a) ものの形相 (εἶδος), (b) ものの質料 (ύλη), (c) 包むものと包まれるものの両方の最端の面と面との隔たり (διάστημα), あるいは (d) 最端の面そのもの (του περιέχοντος) である<sup>12</sup>。しかし、ものはその (a) 形相を (iv) 離れることができないので、それは確かに場所ではない。同じように、場所は (b) 質料ではない。なぜならば、もし我々は、ものの (b) 質料を変えれば、それは違うものになるだろうが、その場所は (iv) 変わらない。つまり、ものとその (c) 隔たりは (ii) 不可分であるので、場所はある (c) 隔たりではない。したがって、確かに (d) 「両方の最端の面そのものがその物体の場所である」ということになる<sup>13</sup>。すなわち、場所というのはその

内に物体を直接に含む面の結合体である。

場所は直接にものを取り込んでおり、ものの部分ではないので、場所がないものは存在者ではないのと同じように、ものによって満たされていない場所の内に空虚のみが有ると考えられるかもしれない。しかし、運動するものは置くことができる場所に着くとき、それは停止する。例えば、下に多くの土が有るので、水は池に置くことができる。土は水より重いので、水は自然に土の下に運動しない。他方、もし空虚(あるいは無)が含まれている場所があれば、その場所に非存在者のみが有るが、存在しないものは属性がないので存在者に作用を及ぼすことができない。ベルクソンが説明するように、「アリストテレスは全ての運動するものが自然か強制的な力かどちらかによって運動させられると主張し」、<sup>14</sup> 空虚は決して属性がないので、それは物体に何らの力を及ぼすことができない。したがって、空虚の中で、ものは動くこともできず、位置することもできない。それは確かに、不合理であり、空虚は必然的に存在しないことになる。結論として、格言の通り、*Natura abhorret vacuum* と言える。

上述の如く、全てのものは瞬間的な場所が有る。例えば、水の一定量は池にあったが、その後、外的な力—一人の手など—によってその水は器に入れられるかもしれない。それは「強制的な運動」の働きで行われ、ものの瞬間的な場所は変わったことになる。他方、自然的な運動も有るので、自然的な場所—すなわち、ものが的なる強制的な力を受けないときに運動する場所—も存在しなければならない。月下界の四つの元素には各々の重さ(土と水)や軽さ(空気と火)によって与えられている各々の自然的な場所への上下の直線運動が有る。土は最も重い元素であるので、それは自然的に最も低い場所へと運動し、水は土より重くないので、自然的に土の上に運動する。同様に、空気は軽いので、自然的に水の上に運動し、火は最も軽い元素であるので、自然的に最も高い場所に運動する。天体は運動するが、他方、それらの運動は、上下の直線運動ではなく、円運動である。なぜならば、天体は完全であり、対立がないので、天体の運動は対立がない運動、つまり円運動である。その円運動を通じて、天体は運動するが、決して自らの自然的な場所を去らない。そのため、全ての存在するものは最も高い天体の場所の下にあり、ある意味で、全ての存在者の場所を取り囲む場所は恒星—すなわち、最も外側に有る天球—の場所である。

#### 4. ベルクソンにおける等質的環境としての空間

ベルクソンは次のように、『時間と自由』というエッセイを始める。

私たちは自分を表現するこの言葉に頼らざるを得ないし、またたいていの場合、空間のなかでものを考えている。換言すれば、言語というもののために、私たちは私たちのもつ観念相互のあいだに、物質的対象相互のあいだにあるのと同じような明確鮮明な区別、同じ不連続性を立てざるをえなくなってしまうのである。<sup>15</sup>

彼によると、言語は言葉によって表現されるのと同じように、意識は空間によってものを考えるという。あるいは、意識がものを考えることができるようになるためには、それらを空間に置くという。つまり、意識にとって、空間というものは我々を囲む感覚の根本的にアプリアリな基礎である。西田と同じように、ベルクソンは物理的空間を扱わない。物理的空間の存在は証明され得るとしても、だからと言ってそれが「我々は何故、全てのものを空間的に考えるのか」という問題の解決にはならない。F・L・ボグソンによると、ベルクソンにおける空間という概念は、より単純であり、より広いものであるといえる<sup>16</sup>。つまり、空間は意識によって認識されるものであり、感覚的なものの存在のバックグラウンドのような役割を持つ存在である。

カントと同じように、ベルクソンによると、空間は経験的な観念ではなく、無限であり<sup>17</sup>、形而上学的にアプリアリな等質的環境である。もし、空間の存在を議論するとすれば、それは (i) 抽象物 (abstract) (あるいは、抽出物 (extrait)) —すなわち、感覚<sup>18</sup> が持つ共通な属性—か、(ii) 感覚そのもののように堅固な実在<sup>19</sup>か、そのどちらとして空間が意識されているか、このことを解明しなければならない。上述の (ii) の概念はカントによって主張された。彼は『純粹理性判断』の「超越論的感性論」において、空間の存在はそこに有るものに依存せず、それ自身、存在性を有していると考えている<sup>20</sup>。

ベルクソンによると、我々は異なる強さ(内包量) (intensité) の感覚、感情、

情熱などを経験することできる<sup>21</sup>のと同じように、空間に起こる現象の異なる外延量 (*étendue*) を知覚できるといえる。したがって、内包量と外延量は意識の中で類似であり、外的現象と内的感情は同じようなものとして知覚されている。なぜならば、ベルグソンによって、内的感情や情熱も外的空間的なものも「感覚」 (*sensations*) と呼ばれているからである。しかしながら、物体は空間に存在するので、我々はそれらの拡がり (*extension*) を知覚できる。なぜならば、拡がりとは空間の本質的な特徴ではないが、空間に有るものは必ず、拡がりを持たなければならないからである。さらに、ものは空間の外では考えられない。音、味、重さなどのような感覚<sup>22</sup>も、それらは拡がりこそ持たないが、強さ (*intension*) をもつので、我々はある音がより高く、ある味がより甘く、ある人がより重いと言うことができる。それらの感覚は物質的なものではないが、しかし様々な強さの度合いが有るので、その強さは意識によって、物質的なものの拡がりと同じように考えられている。

ベルグソンによると、二つの気体を化合すれば液体が生じるのと同じように、拡がりとは意識の中で、感覚と空間の結合によって生じるという。空間も感覚も拡がりを持たないが、その拡がりとは両者の結合体の本質的な特徴である。しかし、その結合からどのように拡がり(あるいは強さ)が生じるのだろうか。ベルグソンによると、それは意識の働き、すなわち、精神的作用 (*acte de l'esprit*) によって生み出されると言う。彼は次のように述べている。

いまこの作用を特徴づけようとするれば、それが本質的に、空虚な等質的環境 (*milieu vide homogène*) の直観、あるいはむしろその概念形成のうちに存することが分かるであろう。というのは、空間の定義として考えられるのは、多くの同一的にして同時的な感覚を相互に区別することを可能にするもの、ということ以外にはないからである。この場合、それは質的差異化とは別の差異化の原理であり、それゆえ、質をもたない実在だということになる。<sup>23</sup>

二つの感覚を同時に知覚する場合にも、精神的作用はそれらを空間の中で異なる場所に置くことで、我々はそれらを区別できるようになる。それゆえ、空

間そのものには属性が全くない。空間は感覚が有る等質的環境 (milieu homogène) のみである。

動物は空間に対して、人間と違う関係にある。動物は生まれつきの方向感覚によって—例えば、鳥はいつも巣に戻ることができる—空間が外的なものとしてではなく、自分自身の体を空間の一部—すなわち、空間の中に存在するもの—として世界を認識するようにみえる。一方、動物にとっては、感覚は空間と類似であり—例えば、犬は椅子と椅子が存在する空間を区別できない—他方、人間にとっては、空間は外的なものとして考えられており、空間とそこに存在するものの区別は明らかである。ベルクソンによると、動物は人間が理解できない特別な感覚を持っているわけではないと言う。それどころか、人間は等質的環境として空間を認識するが、動物は感覚と空間を同じように認識し、空間とそこに存在するものを区別できない。意識は二つの異なる実在として空間という等質的環境と感覚とを認識する。人間のみが知性を持っているので、動物はそのような精神的作用を持たない。

一方、感覚の拡がりや空間との区別が作用によって生じ、それらはその区別によって認識されている、他方、空間そのものについての認識は違っている。カント<sup>24</sup>と同じように、ベルクソンによると、意識は空間にないものを考えることができないが、何もない空間を考えることが非常に簡単である。したがって、空間は現象に依存するものではなく、ア priori に与えられており、現象の可能性の基礎である。前述のように、ベルクソンにとっては、空間は感覚のバックグラウンド以上のものではなく、ただ「等質的環境」としてのみある。

ベルクソンは「質の不在」(l'absence de toute qualité)<sup>25</sup> から構成されたものとして等質を定義した。プラトンと同じように、彼によると、空間は属性を持たないただの空虚であるので、もし、他の等質のものが有るとしても、それは属性がないので、空間から区別できないことになる。しかし、等質には属性がないとなると、空間と同じように、時間もまた等質のようなものにみえる。

我々は簡単に過去、現在や未来に起こることの区別ができるが、それらは時間そのものの表現ではなく、時間の中にある異なる瞬間に起こる感覚の区別に過ぎないので、時間は、確かに、等質的である。外的感覚は拡がりや空間的場所によって区別されているが、しかし内的感覚は時間によって区別されている

26. 例えば、愛は強さが有るが、拡がりがないので、我々は諸々の愛の感覚をその強さやその時間によって区別することができる。カントと同じように<sup>27</sup>、ベルクソンによると、時間は単に等質的であるわけではなく、無規定的 (indéfini) である。それでは、どのようにして我々は空間と時間を区別できるのか。ベルクソンは次のように、この問題に答えている。

等質的なものの二つの形式が相互にどうして区別されるのか分からなくなるからである。にもかかわらず、人々は一致して、時間を、空間とは異なるが空間と同じく等質的な無規定の環境とみなしている。(中略)したがって、もし時間と空間という、いわゆる等質的なものと称されている二つの形式のうち、一方が他方から派生したものだとする、空間の観念の方が根本的所与だとアプリアリに断定してよい。(中略)無規定的で等質的な環境というかたちで考えられた時間がいかに反省的意識につきまとう空間の亡霊にすぎなくなるかを示すことにしよう。<sup>28</sup>

したがって、ベルクソンによると、時間は空間に依存している。さらに、意識がものを考えることができるようになるためには空間は必要なのである。このことから、「我々は何故空間性を持たないもの—すなわち、内的感覚—を考えることができるのか」という問題が解決される。感情、情熱や他の純粋に強さとしてのみあるものは意識によって時間の中に存在するとされ、区別されている。つまり、意識は、時間を空間に存在するもののように考えているので、時間の中に存在するものは同様に、空間に存在すると、考えられるのである。意識は空間的に時間を考える。なぜならば、我々は「あるものは過去に有る」または「あるものは未来へ進む」と言うからである。それらは深い意味で空間的な表現であるが、時間にもそのような表現を与えることができる。意識によって、時間を考えるために、それは空間化されている。

## 5. 西田幾多郎における「場所」

プラトンやアリストテレスと同じように、西田によると、有るものは必然的

にある場所に於いてある。もし、場所がなくてもものが存在するとすれば、我々は何が存在するのかを理解もできず、存在するものと全く存在しないものを区別することもできなくなるという<sup>29</sup>。

『善の研究』において、西田は主観と客観、原因と結果、経験と実在の間の二元論を批判したことがある。彼によると、全ての存在者全体は一つの統一体として存在し<sup>30</sup>、全ての現象には主観と客観の区別は存在しない。一つの意識現象なのである。

その意識の概念について、西田は次のように説明する。

意識はすべて統一に由りて成立するのである。而してこの統一というのは、小は各個人の日々の意識間の統一より、大は総べての人の意識を結合する宇宙的意識統一に達するのである(意識統一を個人的意識内に限るは純粹経験に加えたる独断にすべきない)。自然界というのはかくの如き超個人的統一に由りて成れる意識の一体系である。我々が個人的主観に由りて自己の経験を統一し、更に超個人的主観に由りて各人の経験を統一してゆくのであって、自然界はこの超個人的主観の対象として生ずるのである。

31

すなわち、意識が、我々の身体において一より正確に言えば我々の脳の中において一生じているのではなく、むしろ、身体が、人間の意識において知覚されているのである(さらに、身体は意識において存在するということが、ある程度は言うことができる)<sup>32</sup>。物体の世界と精神的世界は実在的な区別を持っていないため、世界についての正しい理解は、外的な物的な事物についての理解—すなわち科学—から生まれるのではなく、自己についての理解から生まれる。西田曰く、「物体に由りて精神を説明しようとするのはその本末を顛倒した者といわねばならぬ」<sup>33</sup>。

自然科学者が自然現象の秩序として解するもの—例えば、ニュートンの運動の三法則あるいはケプラーの天体運行の三法則—は、実際、我々の「意識現象」の秩序なのである<sup>34</sup>。そして全く同様に、我々がそれを把握するように促されているところの、精神と自然の対立、精神と身体の対立、主体と客体の対立は、

あくまで単に、「实在の体系」の衝突によって、あるいは、「統一」についての見方の相違によって引き起こされているのである。

したがって、西田における「場所」は、主観と客観の間に区別がない一つの統一体として存在する世界の構造を説明するために主張されたのである。その新たな論理は、主観と客観(あるいは主語と述語)の関係ではなく、ものの「場所」に基づく「場所的論理」である。しかし、彼は述語論が価値を持たないと考えてはいない。彼によると、その伝統的な論理は場所的論理に含まれ、ある意味で、その単純化であるという<sup>35</sup>。それは現象意識の扱いに役立ち、主観と客観や因果関係を説明する必要がある科学に適用され得る。彼が『善の研究』で提案するように、我々は自己の立場ではなく、無の立場から—すなわち、三人称ではなく、一人称の観点から—全ての存在するもの(「私」も含まれている)が統一体として存在する世界を考察すれば、場所に基づく論理は確かに必要なのである。J・W・ハイジックによると、場所的論理を通じて、自己は主観と客観のバックグラウンドから、絶対無のバックグラウンドに移転できると言う<sup>36</sup>。

そもそも、西田における「場所」とは何であるのか。世界(あるいは宇宙)は全ての存在するものを含む統一体として存在するが、それらの物事はその統一体の中で互いに関係している。例えば、人にとって、死が確かなものであるため、「私」は絶えず「私ならざるもの」と関係している。物事やその相関関係は物理的なものではなくても、「あるもの」(あるいはある場所)に存在しなければならない。ただし物理的ではないものの場所は確かに物理的な場所ではない。物理的なものは他の物理的なものと物理的な空間に関係している。両方のものはその空間に自らの物理的な場所があって、物理的な空間自体も存在するので、それも自らの場所に存在しなければならない。すなわち、物理的空間さえ「於いてある場所」がある<sup>37</sup>。したがって、全てのもの、物理的な場所(や空間)さえ、存在する場所がなければならない。全ては場所に存在し、「存在すること」は「場所に存在すること」なのである。

有るものは何かに於いてなければならぬ、然らざれば有るということと無いということとの区別ができないのである。<sup>38</sup>

西田は『善の研究』で説明したように、我々にとって有るもの、すなわち、我々がリアルとして解釈し得るものは意識によって認識され得るもの、つまり、外的な自然現象から、我々の内的意志までである<sup>39</sup>。それらは全て意識現象であり、全ての存在するものは場所に有るので、全ては意識の内に存在しなければならない。千変万化の意識現象は互いに関係し、不変的意識の場の内に存在する。意識現象にとって、その「場」は「場所」のようなものである。もし物事は意識の外に存在するとすれば、意識の内に存在者が全くなくなり、思考(や知る)という働きもなくなる。そして、意識にとって外的なものが有るとしても、それは意識の場の外に有り、意識の立場からは、それは場所もなく存在性もない。西田によると、認識論者<sup>40</sup>にとって、客観は超越的である—すなわち、意識の場の外に存在する—が、超越者や意識は互いに関係する場所がなければならない。

意識はものが存在し、互いに関係する場所であるので、「知る」という働きは自己の外的なものを認識することではなく、自己の内(あるいは、自己の内に映している自己)を注視することである。したがって、「知る」は何処かの場所で観察するのではなく、場所を観察するのでもない。知る者は知られるものそのものの場所に存在するのである。

この点に関し、西田は次のように述べている。

知るものを包むと考えることによって、主観対立の意義を失うと考えるのは、含まれるものに対して外的なる場所が考えられる故である。<sup>41</sup>

意識の内に「於いてあるもの」は知られるもののみではなく、情熱や意志も同じように意識に於いてある。確かに、それら(情意)を認識することは厳密な意味で知ることではないが、情意は存在するので他のものと関係し、それらが「於いてある意識」そのものに作用を及ぼす。つまり、知るもの、知られるもの、情意や全ての意識現象(「相対無」、あるいは物理的な「空虚」も含まれている)が「於いてある意識」の場は最も深い意識の意義である。その意識に相対的なものはなく<sup>42</sup>、全てのものの絶対的な場所であり、それは真の無(あるいは、絶対無)の場所なのである<sup>43</sup>。

## 6. まとめ

西田における「場所」はギリシャ語の τόπος の意味のみではなくプラトンにおける χώρα の様々な特徴を持っている。西田が主張した「場所」はその内で変化し、運動し、相互に関係する物事を完全に取り囲み、受容するもの(あるいは受取る場所のようなもの)である。その上、プラトンの χώρα と同じように、西田における「場所」に関しては、肯定と否定(プラトンの場合)や原因と結果(西田の場合)の区別がある二値論理は当てはまらない。そして、存在するものは場所の内に存在するので、「場所」は確かにものの存在のために必要なものである。しかし、プラトンの χώρα と西田の「場所」は同じものではない。西田自身は次のように述べている。

此の如き、イデヤを受取るものともいうべきものを、プラトンのティマイオスの語に倣うて場所と名づけて置く。無論プラトンの空間(χώρα)とか、受取る場所とかいうものと、私の場所と名づけるものと同じいと考えるのではない。<sup>44</sup>

他方、「場所」はアリストテレスの τόπος と相似点もある。その τόπος というのは物理的なものの空間のみではなく<sup>45</sup>、ものの存在のために、論理的に必要なものである。アリストテレスによると、世界全体は唯一つの不変的な場所に存在し、他の全ての存在者の場所は世界の場所の内に存在する。このようなアリストテレスの考えに対比する意味で西田の考えを述べると、全ての運動し、変化し、生成し、消滅するものは全ての現象が起きる意識の不変的な場に於いてであるという<sup>46</sup>。最後に、次のように言うことができる。前述したように、ベルクソンにとってと同じように、西田にとっても、意識は「ものは何処に存在するか」という問いでは、大切な役割を有する。前者によると、精神的作用を通じて、意識は物事にその空間性を与えるが、他方、後者によると、意識そのものは、実際にものが於いてある場所なのである。

## 註

1. Aristoteles : *Physica IV*, trans. R. P. Hardie & R. K. Gaye in : William D. Ross (ed) : *The Works of Aristotle*. Oxford University Press, 1952. p. 288.
2. プラトン : 『ティマイオス』. 種山恭子 (訳), 『プラトン全集 第十二巻』. 岩波書店, 1975. p. 84.
3. DERRIDA, Jacques : *Khōra*, trans. Ian McLeod in : Thomas Dutoit (ed) : *On the Name*. Stanford University Press, 1992. p. 95.
4. *Idem*. p. 89.
5. *Ibidem*. pp. 91-92.
6. *Ibidem*. p. 96.
7. アリストテレス : 『自然学』. 出隆・岩崎允胤 (訳), 『アリストテレス全集 第三巻』. 岩波書店, 1968. pp. 124-127.
8. TAYLOR, Alfred E. : *A Commentary on Plato's Timaeus*. Oxford University Press, 1928. p. 347.
9. BERGSON, Henri : *Quid Aristoteles de loco senserit*, trans. Anna Lia A. de Almeida Prado. Editora da Unicamp, 2013. pp. 14-15.
10. BERGSON, Henri : *Quid Aristoteles de loco senserit*, trans. Anna Lia A. de Almeida Prado. Editora da Unicamp, 2013. pp. 16-17.
11. Aristoteles : *Physica IV*, trans. R. P. Hardie & R. K. Gaye in : William D. Ross (ed) : *The Works of Aristotle*. Oxford University Press, 1952. pp. 289-290.
12. *Idem*. p. 290.
13. アリストテレス : 『自然学』. 岩崎允胤 (訳), 『アリストテレス全集第三巻』. 岩波書店, 1968. p. 137.
14. BERGSON, Henri : *Quid Aristoteles de loco senserit*, trans. Anna Lia A. de Almeida Prado. Editora da Unicamp, 2013. pp. 66-67.
15. ベルクソン : 『時間と自由』. 中村文郎 (訳) 岩波書店, 2008. p. 9.
16. POGSON, Frank Lubecki : Notes. in : BERGSON, Henri : *Time and Free Will – An essay on the immediate data of consciousness*. Dover Publications, 2001. pp. v—viii.
17. カント : 『純粹理性批判-上巻』. 有福孝岳 (訳) 岩波書店, 2001. p. 100.
18. BERGSON, Henri : *Time and Free Will – An essay on the immediate data of consciousness*. Dover Publications, 2001. p. 92.
19. *Idem*. p. 92.
20. KANT, Immanuel : *Crítica da Razão Pura*, trans. Valério Rohden & Udo Baldur Moosburger. Abril Cultural, 1983. pp. 40—44.
21. ベルクソン : 『時間と自由』. 中村文郎 (訳) 岩波書店, 2008. p. 11.
22. BERGSON, Henri : *Time and Free Will – An essay on the immediate data of consciousness*. Dover Publications, 2001. pp. 41—60.
23. ベルクソン : 『時間と自由』. 中村文郎 (訳) 岩波書店, 2008. pp. 115—116.
24. JAMMER, Max : *Concepts of Space : The History of theories of space in physics*. Dover Publications, 1954. p. 137.
25. ベルクソン : 『時間と自由』. 中村文郎 (訳) 岩波書店, 2008. p. 119.

- <sup>26</sup> BERGSON, Henri : *Time and Free Will – An essay on the immediate data of consciousness*. Dover Publications, 2001. pp. 98—99.
- <sup>27</sup> KANT, Immanuel : *Crítica da Razão Pura*, trans. Valério Rohden & Udo Baldur Moosburger. Abril Cultural, 1983. p. 45.
- <sup>28</sup> ベルクソン : 『時間と自由』. 中村文郎(訳)岩波書店, 2008. pp. 119—121.
- <sup>29</sup> 西田幾多郎 : 『場所』, : 上田閑照(編) : 『西田幾多郎哲学論集 I』岩波書店, 1987. p. 67.
- <sup>30</sup> スピノザにおける *Deus sive Natura* という概念と同じような意味を持つ.
- <sup>31</sup> 西田幾多郎 : 『善の研究』. 岩波文庫, 2009. p. 240.
- <sup>32</sup> 同書. p. 43.
- <sup>33</sup> 同書. p. 240.
- <sup>34</sup> 同書. pp. 238-240.
- <sup>35</sup> WARGO, Robert J. J. : *The Logic of Nothingness : A Study of Nishida Kitaro*. University of Hawaii Press, 2005. p. 94.
- <sup>36</sup> HEISIG, James W. : *Philosophers of Nothingness : An Essay on the Kyoto School*. University of Hawai'i Press, 2001. p. 73.
- <sup>37</sup> 西田幾多郎 『場所』, : 上田閑照(編) : 『西田幾多郎哲学論集 I』岩波書店, 1987. pp. 67-68.
- <sup>38</sup> 同書. p. 67.
- <sup>39</sup> NISHIDA, Kitaro : *An inquiry into the good*, trans. Masao Abe & Christopher Ives, Yale University Press, 1990. p. 160.
- <sup>40</sup> 例えば, カントにおける物自体(Ding-an-sich)が挙げられる.
- <sup>41</sup> 西田幾多郎 : 『場所』, : 上田閑照(編) : 『西田幾多郎哲学論集 I』岩波書店, 1987. p. 76.
- <sup>42</sup> KRUMMEL, John W. H. Notes. in : Kitaro Nishida : *Place & Dialectic : Two Essays by Nishida Kitarō*, trans. John W. H. Krummel & Shigenori Nagatomo. Oxford University Press, 2012. p. 196.
- <sup>43</sup> 西田幾多郎 : 『場所』, : 上田閑照(編) : 『西田幾多郎哲学論集 I』岩波書店, 1987. p. 84.
- <sup>44</sup> 同書. p. 68.
- <sup>45</sup> 同書. p. 76.
- <sup>46</sup> 同書. p. 77.

## 参考文献

- Aristoteles : *Physica IV*, trans. R. P. Hardie & R. K. Gaye. in : William D. Ross (ed) : *The Works of Aristotle*. Oxford University Press, 1952.  
 ————— : 『自然学』. 出隆・岩崎允胤(訳), : 『アリストテレス全集 第三巻』. 岩波書店, 1968.
- BERGSON, Henri : *Quid Aristoteles de loco senserit*, trans. Anna Lia A. de Almeida Prado. Editora da Unicamp, 2013.  
 ————— : *Essai sur les données immédiates de la conscience*. Ultraletters, 2013.  
 ————— : *Time and Free Will – An essay on the immediate data of consciousness*, trans. Frank Lubecki Pogson. Dover Publications, 2001.  
 ————— : 『時間と自由』. 中村文郎(訳)岩波書店, 2008.

- DERRIDA, Jacques : *Khōra*, trans. Ian McLeod. in : Thomas Dutoit (ed) : *On the Name*. Stanford University Press, 1992.
- HEISIG, James W. : *Philosophers of Nothingness : An Essay on the Kyoto School*. University of Hawai'i Press, 2001.
- JAMMER, Max : *Concepts of Space : The History of theories of space in physics*. Dover Publications, 1954.
- KANT, Immanuel : *Crítica da Razão Pura*, trans. Valério Rohden & Udo Balduer Moosburger. Abril Cultural, 1983.  
----- : 『純粹理性批判』. 有福孝岳(訳)岩波書店, 2001.
- Plato : *Timaeus*, trans. Donald J. Zeyl. in : John M. Cooper (ed) : *Plato : Complete Works*. Hackett Publishing Company, 1997.  
----- : 『ティマイオス』. 種山恭子(訳), : 『プラトン全集 第十二巻』. 岩波書店, 1975.
- TAYLOR, Alfred E. : *A Commentary on Plato's Timaeus*. Oxford University Press, 1928.
- WARGO, Robert J. J. : *The Logic of Nothingness : A Study of Nishida Kitaro*. University of Hawaii Press, 2005.
- 西田幾多郎 : 『場所』., : 上田閑照(編) : 『西田幾多郎哲学論集 1』岩波書店, 1987.  
----- : *Basho*. in Kitaro Nishida : *Place & Dialectic : Two Essays by Nishida Kitarō*, trans. John W. H. Krummel & Shigenori Nagatomo. Oxford University Press, 2012.  
----- : 『善の研究』. 岩波文庫, 2009.  
----- : *An inquiry into the good*, trans. Masao Abe & Christopher Ives. Yale University Press, 1990.